



官邸記者クラブによる小淵首相への取材風景

次号は夏の大躍進号

渾身のグラビア&特集記事満載! 8月23日(月)発売

西川氏はそういういながら、自らの体験談を告白した。「ただし、これは隠す必要はないと思うんですが、ある党の党首と一緒に外国、アメリカへ同行取材した時にですね、飛行機に乗ったら、私が幹事団の幹事、事務局長役だったんですけど、(党首側から)公的なイベントがあつて皆さんと食事をする時間がなかなか取れない、だから悪いけどこれで食事してくれないかといつてですね、ある程度のお金を渡されました。これは何ですかと聞いて、受け取るわけにはいきませんと飛行機の中で返した。そういう

ケースはございますが、それがはたして機密費から出たのか、皆目知る由もないし、尋ねてみせんからわかりません」
 読売テレビの岩田氏は、本社が大阪にあり、在京記者会に所属してはいないから関係がなかったという。
 最後は朝日新聞の星氏だ。「機密費の問題は、制度の問題と個別の事件というか出来事の事件を分けて考えた方が良いと思いますね」
 機密費の使途公開に関する制度見直しを「必要」とした上で、「個別の事件」についてはこう述べた。

「個別の誰がどうしたという事について、これは私の会社というのはそういうことに対して比較的厳格で、もしそういうことがあるとかなりこっぴどいペナルティを受けるものですから、非常に用心深く対応しております。残念ながらおられますか、全く身に覚えもありませんし、おそらく先ほど田崎さんがいわれた、20年、30年前にそういうことが日常的にあったのかも

しませんが、その辺はちょっと聞きかじりや伝聞でお話しようなことではないと思っております」
 おわりの通り、外遊時の現金配布を裏付ける共同・西川氏の発言を除き、まるでお互いをかばい合うように皆、「昔はあったかもしれないし、周りにもなかった」というばかり。徳本氏が提案した調査委員会については唯一、西川氏が、「新聞協会ということじゃなく各マスコミできちんと調査して、そんな事実はないと対外的にアピールする必要もある」と発言しただけだった。総じて、現実を直視しない何とも残念な対応に終始したといわざるを得ない。

とりわけ残念なのが星氏と田崎氏だ。二人はポストの7月9日号で取材班が行なったアンケートにも答えている。星氏は朝日新聞としての回答で、「弊社の記者が内閣官房機密費を受け取った事実は一切ありません」というのみだった。星氏は確かに「政治とカネ」に厳格であり、私の取材でも彼自身は受け取っていないことは確かだ。ただし、彼個人の正当性と、会社の問題は別である。内部調査もせず、国民の税金を原資とする機密費のマスコミ汚染を「個別の事件」と些末なことのように片付けるのはおかし。

田崎氏にいたっては、ポストのアンケートに「そういう事実はまったく知りません」と答えている。今回の受け答えを見る限り、まったく知らないわけがないと思うのだが。
 星氏、田崎氏には改めて取材依頼をしたが、応じてもらえなかった。それどころか田崎氏は、「不愉快な問い合わせをしてくる出版社とはお付き合いし兼ねる」として、小学館からの取材は今後受けないと逆ギレする始末で、ジャーナリストとして尊敬してきた田崎氏のこうした対応は極めて悲しい限りだ。
 7月31日、TBSラジオ「久米宏 ラジオなんですけど」で官房機密費がテ

マとして取り上げられた。私がこの連載で書いたことをあらためて説明する前に、以前からこの問題に大きな関心を示していた久米氏は開口一番、かつて郵政大臣と会食した際、ランチをこ馳走になつてしまったエピソードを告白し、「慚愧に堪えない」と述べた。たった一度のことを、ここまで後悔している人間がいるのだ。沈黙を続ける記者たちとの差は余りに大きい。
 野中氏と記者らのかばい合いからは、官邸と番記者たちで作られる「官報複合体」の強固な癒着関係が浮かび上がってくる。しかしその関係も、記者クラブ崩壊とともに変わりつつある。飯に私がいなくても、この問題に関する他のジャーナリストたちの追及や世間の関心は止まないだろう。徳本氏のいうように、記者クラブメディア及び日本新聞協会はせめて日本相撲協会程度の第三者委員会を作り、内部調査を行なうべきだと、最後に通告しよう。
 (第一部完)